

## 周作人と日本 － 比較文化論の視点から －（Ⅰ）

藤 田 昌 志

周作人と日本  
－ 从比較文化論の观点看 －（Ⅰ）

FUJITA Masashi

### 《提綱》

中国現代文学史上有略語叫做“二周”。那是指魯迅和第二个弟弟周作人。魯迅是中国現代文学史上頗有名氣受人敬重的文豪之一。与之相反，受到“漢奸”判決的周作人却被社会遺忘許久了。然而周作人是推動五四新文化運動的先驅之一，是对樹立中国現代文学的基础有功的人。周作人年輕時在日本留過五年學，對日本有深刻的了解，寫了有关日本（文化）和日本人的文章。本篇論文拟就考察周作人和日本的关系，試論他的有关日本（文化）和日本人。

### 一、序

“二周”ということばがある。『二人の周』という意味である。一人は周樹人、こと魯迅、中国近代文学を代表する「文豪」である。その地位は毛沢東による御墨付きによって不動のものとなったが、それと対照的に、もう一人の周、つまり魯迅の弟、周作人は「漢奸」（＝売国奴、侵略者の手先）の汚名を着せられ、中華人民共和國成立以後、表舞台に立つこともなく、ひっそり日本文学の翻訳などをして生計を立てた。文化大革命の発動後、一年経たずして病死したが、今もその評価は肯定的なものではない。それは日中全面戦争開始後、日本支配下の北京に留まり、1939年秋には北京大学文学院長に就任し、また、日本の占領下で教育総署督弁の職に就いたことによる。戦後、漢奸裁判にかけられ1949年1月に釈放されたが、それは大きな汚点として尾を引き、中国人民共和国成立後は北京人民出版社で翻訳の仕事に従事したが、社会の片隅で生活していた感が強い。

周作人は若い時、5年間（1906－1911）日本に留学している。そしてその時の下宿屋で会った日本人、羽太信子と結婚している。留学時代の周作人は日本文化に接し、深い親近感を持ったようである。また、後には《日本管窺》として周作人の日本文化論を展開している。周作人の歩んだ道は国民党か共産党かといった二者択一的な道ではなく、日本と

の提携を模索する道であったと考えられる。もちろん、それは結果的に「漢奸」という評価を下されることになったが、日本が中国を侵略する中で、最大限、日本を理解しようとした知識人が中国にいたことに日本は感謝しなければならないのではないか。現在の日本にどれだけ中国のこと（及び自国のこと）を総合的に知っている人がいるか（又、それは中国についても同様に言える）ということを考えて周作人に焦点をあてることに大きな意義を感じる。本稿では日本との関わりが深かった周作人について、その日本及び日本文化との関係、周作人の日本文化論を中心に論じてみたいと思う。

## 二、日本留学時代の周作人

1885年1月16日（清光緒甲由年12月初一）に紹興城東昌坊口新台門の周鳳儀（伯宣）の家に周作人は生まれた。「読書人」（科挙合格をめざして勉強を続ける人、又はその階級）の家に生まれた周作人であったが、時代の波には逆らえず、1901年9月に、1898年6月に南京へ赴いた兄、魯迅に続いて南京の江南水師学堂に入学する。その後、1906年の夏には日本に留学する。（その年の春、魯迅は仙台医学専門学校を退学し、東京に出て、本格的に文学活動を開始している。）1907年の春には東京の本郷湯島二丁目の伏見館から本郷区東竹町の中越館へ転居し、1908年の4月には、更に本郷区西片町10番地呂字7号（夏目漱石旧居）に引っ越し、許寿裳たちと周氏兄弟、あわせて5人で住んだその住居を「悟舎」と名付けた。翌1909年2月にはまた引っ越し、西片町10番地丙字19号に移っている。ここで23才の周作人は料理の手伝いなどをしていた21才の羽太信子に出会い、4ヶ月後の6月に二人は結婚する。

西片町の下宿の近くには「寄席」があったので落語をよく聞いたようである。<sup>(1)</sup> そこから更に「俳諧」に興味を持つようになり、松尾芭蕉、小林一茶、与謝蕪村、正岡子規、永井荷風、戸川秋骨、文泉子、谷崎潤一郎等の作品を読んでいった。また、当時の日本の小説や散文もよく読み、夏目漱石、森鷗外や白樺派の有島武郎等の作品にも親しんだ。日本文学への造詣の深さは時に精神的な一致を生み一体感を生じさせた。しかし、それが政治的主張と重なり合っていくことには充分、注意を払うべきであった。次のように述べるなどそうである。“日本の詩人文人从前常说到东洋人的悲哀，和西洋的命运及境遇迥异的东洋人的苦辛，我读了很有感触”“人们常说，亚细亚是一个。这话当然是对的，我也曾这样说过，东亚的文化是整个的，东亚的命运也是整个的。”<sup>(2)</sup>（「日本の詩人文人は、東洋人の悲哀、西洋の運命や境遇と全く異なる東洋人の苦しみのことをよく口にした。私はそれを読んで感銘を受けた。」「人々はよく、アジアは一つだと言う。それは当然正しいし、私もかつてそう言った、東亜の文化は一つであり、東亜の運命も一つなのである。」「東洋

人」と言い「東亜」と言い、それは実体の定かでない、一つの思い、情念のようなものであった。エトス（基本的精神的雰囲気）としての、運命共同体としての「東洋人」「東亜」を言うのは自由であるが、それが政治的主張に彩られ、醜惡な姿を曝していくのが悲劇であった。今の時点から過去を安易に、高踏的に斬罪することには注意しなければならないが、時代の流れに迎合する面が周作人に全くなかったとは言えない。もっとも政治的主張に彩られていることに、中国の伝統的知識人が「政治」に自ら参加し、自らの理想を実現していくことを窮極の理想としたことの再現を見ることも可能かもしれない。中国では元来、「文学」もより上位の「政治」の目によって色分けされる。周作人が「東洋人」「東亜」を口にする際の、そうした背景にも注意しておく必要はあると思う。（「文学」と「政治」が互いに軽んじ合い、「棲み分け」てきた日本とは状況が全く異なるのが中国である。）

1906年の夏、来日し、1911年の5月に日本を離れるまでの5年間の留学時代に周作人は合計5つの中、長編小説と13の短編小説を中国語に翻訳している。1907年には《红星佚史》を出版した。1908年にはポーランドの作家シェンコヴィッチの中編小説《炭画》を翻訳したが、それは出版元の商務印書館から送り返されてしまった。その理由として“行文生涩，读之如对古书，颇不通俗，殊为憾事。”<sup>(3)</sup>（「文章が難しく、古文を読んでいるようで、わかりにくく、残念です」）という手紙が添えられていたとのことであるから翻訳、出版が大変であったことが窺い知れる。1909年の3月と7月には外国短編小説集《域外小説集》二巻を魯迅と共に“会稽 周氏兄弟”の名で東京の神田印刷所から出版しているが、その中には周作人の訳した13の短編小説が含まれている。

《域外小説集》の16の短編小説のうち、英・米・仏の小説が各1編、その他はロシアのものが7編、東欧北欧の被圧迫民族のものが6編であった。従来、概訳、意識ではなく、直訳を採用した翻訳作品集であった。《域外小説集》は1921年に上海群益書店から再版が出たが魯迅は「周作人」の名で「序」を書き、《域外小説集》両巻出版の意図するところを次のように述べている。“我在日本留学时候，有一种茫漠的希望：以为文艺是可以转移性情，改造社会的。因为这意见，便自然而然的想到介绍外国新文学这一件事。”（「私が日本に留学していた頃、漠然とした思いがあった。つまり、文芸は心情を伝え、社会を改造できると思っていたのである。そう思っていたので自然、外国の新文学の紹介を思いついたのである。」）魯迅にとっての文学とは窮極では、やはり、「載道文学」（＝道を載せる文学）なのであった。模範や道義を伝え、社会矛盾を改造しようとするものなのであった。その意味で魯迅は伝統的文学観の持ち主であった。それに対して、周作人は後年「言志」（＝「志を言う」）文学ということを主張する。個人の感情、気持ちを述べるのが文学であるという考えである。その根底にあるものは西洋流の個人主義に近いものであったのだら

うか。それとも過去の典型性を持つ文人であったのだろうか。(明末の公安派、竟陵派に対する周作人の注目が想起される。周作人が公安、竟陵派を“五四”新文化運動の淵源と見なしていたことは夙に有名である。たとえば『中国新文学の源流』でそう述べている。)

魯迅と周作人の気質、生き方の違いのようなものについて、次のように的を得た評論をする人もいる。“周作人“中庸”，“平和”，故主張“论文之旨，折情就理，唯以和顺为长”，认为“有闲情绮语，著之篇章”就已经是新的文艺了。魯迅则认为“平和为物，不见于人间”，“平和之名，等于无有”。所以他喜欢“摩罗”诗人由“超脱古范，真挚所信”的叛逆精神而发出的“刚建抗拒破坏挑战之声。”其实，魯迅在撰写『摩罗诗力说』时，引用的波兰“复仇诗人”事略，还是由周作人从英译本的丹麦评论家李兰兑斯『波兰印象记』中口译的，然而周作人并没有感染上“摩罗”精神。”<sup>(4)</sup>（「周作人は「中庸」「平和」であるから「論の主旨は情を折って理に就き、和順を以て長とする」ことを主張するのであり、「閑情綺語があればそれを篇章に著わす」のが新しい文芸だと考えているのである。魯迅は「平和というものは人間世界には見えず」、「平和の名は無いに等しい」と考える。だから彼は「摩羅」詩派詩人が「古い規範から超脱し、直接、信ずるところを抒す」<sup>あらわ</sup>「反逆精神から発する「剛建反抗破壊挑戦の声」を好む。実は、魯迅が『摩羅詩力説』を書く時、引用したポーランドの「復仇詩人」の事略は、周作人によってデンマークの評論家ブランデスの『ポーランド印象記』の英訳本から口述訳されたものであるが、周作人は「摩羅」の精神に感染しなかったのである。」）魯迅が動とすれば周作人は静、魯迅が反抗を旨とするとしたら、周作人は“和順”（「おとなしく温和」）を旨とした。少なくとも中国の評者はおおむね、そうした考え方に立っている。そして更に言えば、魯迅は中国共産党と共に道を歩んだ“同伴者”であり、「善」であるが、周作人は途中から“個人主義”（従来の中国では決して良い意味ではなく、利己主義者と同一の言葉であった）者となり「漢奸」となった「悪」であるというのがこれまでの中国の評論家の一致した見方であった。そして、それは中国共産党の考えがそうであることを意味していた。

1911年5月、周作人夫婦は魯迅に連れられて帰国する。

### 三、帰国後の周作人－日本との関係を中心にして－

1912年の元旦、孫文が南京で臨時大統領に就任し中華民国の成立を宣言した。その年の2月、周作人は友人の朱遜<sup>てき</sup>先の推薦で浙江軍政府教育司課長となったが、妻、信子の出産のため出仕はしなかった。子供が生まれてから7月のある日になってやっと杭州へ任に赴いた。しかし、既に後任者がいて、やむなく90元の月給を受けとり、それを旅費として故郷、紹興に帰る。1913年3月には紹興教育会の会長に選ばれ、また省立第五中学の

英語教員にもなっている。その後 1917 年 9 月に北京大学の蔡元培から一通の手紙が届く。その内容は周作人を北京大学文科教授兼国史編纂所編輯員として迎えたいという内容のものであった。その年の春には既に北京に赴いていた周作人は以後、1967 年の春に亡くなるまで北京を定住の地とした。

1917 年には張勳<sup>くん</sup>の復辟があった。翌 1918 年の 4 月 19 日に北京大学文科研究所小説研究会で周作人は《日本近三十年小説的発達》（「日本近三十年の小説の発展」）と題する発表を行っている。そこで「人生のための芸術」という現実主義の文芸理論をはっきりと述べている。<sup>(5)</sup>「人生のための芸術」派というのは坪内逍遙から二葉亭四迷へと続いていく現実主義の文学流派のことを指している。二葉亭はロシア文学の影響を受けており、日本の明治時代の現実主義も、そのロシア文学の現実主義（そして東欧被圧迫民族の文学）を導入したものであるとしている。《域外小説集》の翻訳はこうした認識と深い関係があると思われる。

1919 年の 3 月 15 日《新青年》6 卷 3 号で周作人は「新しい村」を紹介する文章（＝《日本的新村》）を書き、同年 7 月には九州の日向新村を見に行っている。北京大学に周作人が中心となって新村支部を作ったことから、その熱の入れようが窺い知れるが、左・右両勢力の増大の中で、そうした情熱は冷めていかざるを得なかったようである。

この時期の周作人の小品文は大きく二つに分けられる。第一は社会批判を中心とするもので、その中には封建伝統思想批判や時弊批判、軍閥批判、国民性批判等が含まれる。第二は修辭的文體のもの、「美文」中心のものである。この第二の小品文には日本の俳諧の影響が見られ、孫伏園へあてた《山中雜信》や《蒼蠅》にはそれが感じられる。<sup>(6)</sup>

次に 1921 年から 1923 年の周作人の日本文学の批評、紹介を概観してみたいと思う。1924 年以降、周作人の関心は小品文の創作に移っていった感があるが、五四以降、1923 年までの初期の周作人は文芸批評家、外国文芸の紹介者・翻訳家、社会批評家としての啓蒙的側面が強い。その側面を日本文学、日本との関係で見ていこうと思うのである。1921 年 3 月 20 日に書かれた《日本の詩歌》では小泉八雲等のことばを引用しつつ「詩歌の空氣の普遍（＝筆者注：一般の農民、商人でも俳句などを趣味としていることを指す）」は日本の特色で、その理由は「第一种是詩思の深广，第二种是詩體的簡易；二者相合；便造成上面所說的詩歌普遍的事實。」<sup>(7)</sup>（「第一に詩的感情の深さ、広さであり、第二は五七調の作りやすさである。つまり、二者がいっしょになって、上述の詩歌の普遍という事実をつくりあげたのである。」）としている。又、日本と中国の詩の違いについては次のように述べている。「第一，日本的詩歌只有一兩行，沒有若干韻的長篇，可以叙整段的事，所以如《長恨歌》這類的詩，全然沒有；但他雖不適于叙事，若要描写一地的景色，一時的情調，

却很擅长。”<sup>(8)</sup>（「第一に日本の詩歌は一、二行で、韻を踏んだ長編がなく、全体的なことを表すことができるので《長恨歌》のような詩は全くない。叙事には向いていないが、ある場所の景色、一時の情調を描写するのには向いている。」）と日本の詩歌の瞬間性、全体性などを第一の特徴として挙げ、続けて第二の特徴について次のように述べる。“第二、一首歌中用字不多，所以务求简洁精炼，容不下典故词藻夹在中间，如《长恨歌》里的“鸳鸯瓦霜华重，翡翠衾寒谁与共”这样的句子，也决没有。绝句中的“孤舟蓑笠翁，独钓寒江雪”，略像一首咏冬季的俳句，可是孤独等字连续的用，有了说尽的嫌忌。“漠漠水田飞白鹭”，可以算得极相近了，差不多是一幅完全的俳句的意境。但在中国这七个字算不得一首诗，因为意境虽好，七个单音太迫促了，不能将这印象深深印入人的脑里，又展开去，造成一个如画的诗境，所以只当作一首里的一部分，仿佛大幅山水画的一角小景，作为点缀的东西。日本的歌，譬如用同一的意境，却将水田白鹭作中心，暗示一种情景，成为完全独立的短诗：这是从言语与诗形上来的特色，与中国大不相同的地方。凡是诗歌，皆不易译，日本的尤甚：～”<sup>(9)</sup>（「第二に一つの歌の中で用いる字が多くないので簡潔さ、純粹さを求め、《長恨歌》の“鸳鸯瓦霜華重，翡翠衾寒誰与共”のように典故詞藻を間にはさむ余地がない。絶句の“孤舟蓑笠翁，独釣寒江雪”はほぼ冬を詠じる俳句であるが、孤独という字を連続して用いているのが‘説尽’（言ったきり）（筆者注：余韻がないという意）の嫌いがある。“漠漠水田飛白鹭”は非常に近く、ほとんど完全な俳句の意境と言える。しかし、中国ではこの七字は詩とは言えない。なぜなら意境はよいが、七つの単音が短すぎて、印象を深く人の脳裏に残せず、発展して行って、画のような意境を作れないので、一つの詩の一部分とみなされ、何かのあしらいとしての大きな山水画の小景のようであるからである。日本の歌はたとえば同一の意境を用い、水田、白鹭を中心として、ある情景を暗示し、完く独立した短詩を成すのである。それは言語と詩形式から来る特色で、中国と大きく異なるところである。詩歌はどれも訳すのが難しいが、日本のはとくにそうである。」）周作人は日本の詩歌の特徴 — 普遍性、叙情性、簡潔性 — を挙げ、又、それが中国の詩歌と大いに異なることを述べている。又、日本の詩歌が“含蓄”“余韻”を重んじるのは中国の漢字の影響を受けたとする説を排し、漢字といっても訓読みのものを用いるのであるし、日本語は子音と母音が合わさって表現され、また、中国語の一音一義とも異なる。したがって“含蓄”“余韻”の尊重は漢字と何らの関係がないとしている。<sup>(10)</sup>

1923年5月に書かれた《<sup>の</sup>日本的諷刺詩》では「川柳」をとりあげている。周作人は「川柳」を人情の機微を明らかにするもので“根本上并没有什么恶意”（「全く何らの悪意もない」）ものであり、“他的讽刺，乃是乐天家的一种玩世不恭的态度而并不是厌世者的诅咒。”（「その諷刺は楽天家の「遊び」の態度であり、厭世家の呪詛ではない。」）と考えて

いる。周作人という人は（俳句の）簡潔性（“简洁精炼”）や（川柳の）“恶意”（悪意）のない点などを好む。周作人が日本に惹かれたのは、日本の持つ精神の生地としての「天真爛漫」さ、闊達さのようなものではなかったかと思う。（《汉译《古事记・神代卷》引言》<sup>(11)</sup>で次のように述べているのも傍証となるであろう。“《古事记》神话之学术的价值是无可疑的，但我们拿来当文艺看，也是颇有趣味的东西。日本人本来是艺术的国民，他的制作上有好些印度中国影响的痕迹，却仍保有其独特的精彩；或者缺少庄严雄浑的空想，但其优美轻巧的地方也非远东的别民族所能及。他还有他自己的人情味，他的笔致都有一种润泽，不是干枯粗厉的，这使我最觉得有趣味。”（「《古事記》の学術的価値は疑いないが、文芸として見るとまたそれも興味深い。日本人は元来、芸術的国民で、その制作上、多くのインド、中国の影響の跡があるが、独特の輝きも保っている。荘厳雄大な空想には欠けるが、その優美軽妙なところは極東の他の民族の及ぶところではない。独自の人情味があり、その筆致には潤いがあり、ひからびてはいないのが面白い。）」

しかし「川柳」にも欠点があると周作人は言う。それは、“他的过于理智”（「理屈に走りすぎる」こと）であり、“教训”“骂倒”（「罵倒」）が過ぎる点であると言う。その次に、それより大きな欠点はその“反动思想”（「反動思想」）であると言う。“乔治谟耳（George Moore）曾说民众思想都是反动的，川柳是日本一种民众化的诗，所以其思想也就偏于保守；在民间自然发生的诗谣尚且不免如此，在诗人手中自然更甚，因为他们因了教育的影响，思想更是统一了。明治维新以后的川柳，虽然很是发达，却充满了儒教的专制思想，对于新的事物常加无理的反对，而且又中了军国主义的毒，有人把精忠报国的话混到诗里边去，不能不说是一个大谬误。说点粗鄙的话还于诗无碍，说些正大光明的国家主义，或者纲常名教的话，却全然的不是诗了。”<sup>(12)</sup>（「ジョージ・モアはかつて民衆思想は反動的だと言ったが、川柳は日本の民衆化した詩であるのでその思想は保守に偏っている。民間で自然発生した詩謡は尚さらそれを免れないが、詩人の手中ではもっと甚しい、それは教育の影響に困って思想が統一されるからである。明治維新以後の川柳は発展したが、儒教の専制思想に満ち、新しいものに常にわけもなく反対し、軍国主義の毒にあたって、尽忠報国を詩に書く者までいて、大いなる誤りである。粗野なことを言っても詩にさまたげとはならないが、光明正大な国家主義や綱常名教を言っては詩ではなくなってしまうのである。）」このように周作人は「川柳」を諸手を挙げて賞讃していたわけではないがその“没有什么恶意”は高く評価していたように思われる。

1922年7月24日に書かれた《森鷗外博士》<sup>(13)</sup>では《游戏》（森鷗外の作品の中国語訳）の中の登場人物、木村の“无论作什么事，都是一种游戏”（「何をするのも遊び」）という心情を“理知的人的透明的虚无的思想”（「理知的な人の透明な虚無思想」）とし、作品は

当時の文壇の正統派からは嘲笑されたが「現代人の一つの心情」であり「存在価値はある」としている。周作人の冷静沈着さが表れた批評である。

1923年7月に書かれた《有島武郎》<sup>(14)</sup>では有島武郎の情死を悼むと共に、周作人は次のように述べている。“我们想知道他们的死的缘由，但并不想去加以判断：无论为了什么缘由，既然以自己的生命酬报了自己的感情或思想，一种严肃掩住了我们的口了。我们固然不应玩弄生，也正不应侮蔑死。”（「その死の理由は知りたいが、それに判断を加えたいとは思わない。何の理由のためであれ、自己の生命で自己の感情、思想に報いたのだから、ある厳肅さに我々は口をつぐむのである。もちろん生をもてあそぶべきではないが、同様に、又、死も侮蔑すべきではない。」）としている。中国人は元来、自殺を忌み嫌うと言われるが、それはおくとして、周作人の有島武郎への思いは注釈なしにその死を悼むというものであったのだろう。

以上のように1921年から1923年の周作人の日本文学についての批評、紹介を概観したわけであるが、そこには冷静沈着な批評態度が見られると同時に、日本・日本文学の簡潔性、天真爛漫さ、闊達さへの肯定的態度が見受けられるのである。

1924年になると周作人に伝統回帰の兆しが見えはじめる。1924年11月17日出版の《語絲》創刊号に載せた《生活之芸術》（「生活の芸術」）の内容は、“生活之艺术这个名词，用中国固有的字来说便是所谓礼。”（「生活の芸術という名詞は中国固有の字で言うといわゆる礼である。」）、“一般的生活之艺术”（「一般の生活の芸術」）を復興するには宋明の礼教が起こる以前の中国の固有の礼を復興しなければならないというものであった。

1922年には“非宗教大同盟”と論戦していることから見ても、前後するがこの二年前の周作人は既に左派とは異なる道を歩み始めていたのであろう。また、1923年には“兄弟失和”があった。《魯迅日記》（1923年7月19日）に“上午启孟 自持信来，后邀欲问之，不至。”（「午前、啓蒙（周作人）自ら手紙を持ち来たりて、のちに迎えて之に問うを欲するも至らず。」）とあるように二人は絶交している。思想上の対立の可能性がないとは言えない。

1924年以降の周作人の関心は小品文の創作に移って行った感があるが、それはやはり大きくは⑦論議性の小品文（＝社会批判を中心とする）⑧記叙性、抒情性小品文（＝“美文”）の二つに分けられるであろう。<sup>(15)</sup>

1930年代、周作人の“雑学”（「雑学」）の中の一つに日本研究がある。その中の日本文学や日本での生活を取り扱った作品には《東京散策記》《与謝野先生紀念》《隅田川兩岸一覽》《冬天的蠅》《日本的落語》などがある。谷崎潤一郎や永井荷風について言及することもあった。しかし、周作人の日本研究と言えば、やはり、その《日本管窺》を中



心にとりあげないわけにはいかない。その詳細は「周作人と日本 — 比較文化論の視点から — (II)」に譲ることにする。

〔注〕

- (1) 李景彬・邱夢英 (1996) 《周作人評伝》重慶出版社 P. 42
- (2) 周作人《苦口甘口・草園与茅屋》
- (3) 同(1)書 P. 47
- (4) 同(1)書 P. 55
- (5) 同(1)書 P. 81、P. 94
- (6) 同(1)書 P. 123
- (7) 張明高・範橋編 (1992) 《周作人散文第三集》中国廣播電視出版社 P. 210
- (8) 同(7)書 P. 212
- (9) 同(7)書 PP. 212—213
- (10) 同(7)書 P. 212
- (11) 同(7)書 P. 244
- (12) 同(7)書 P. 227
- (13) 同(7)書 PP. 228—231
- (14) 同(7)書 PP. 232—234
- (15) 同(1)書 P. 172 五四退潮期から1966年までの周作人の事跡については以下の筆者の記述を参考にしたい。

「五四退潮期から後の周作人は1929年末に「閉門讀書論」を提出するなどして国民党の恐怖政治に対応するしかなかった。しかし、その中でも1932年2月から4月に輔仁大学で8回行った学術講演を整理した「中国新文学的源流」を出している。周作人はその中で、中国文学の発展を“兩種対立的力量”(「2つの対立する力」)と考える。つまり「言志派」と「載道派」の「起伏」と考え、“過去是如此、将来也总如此”(「過去も将来もそうである」)とする。明末の公安、竟陵派を代表とする新文学運動が清代の反動を経て、反動に対する反動としての五四新文化運動を生んだとし、「旧」と「新」の間に歴史的連続性を見いだそうとした。

1932年には満州国建国が発表され、1937年7月7日には蘆溝橋事変が起こり、同年7月29日には日本軍が北平を占拠する。周作人は日本侵略下の北平に留まり、北京大学の学校財産の保管に当たった。“留平教授”(「北平に留まった教授」)はわずか4人であったから疑念を持たれても仕方がなかったであろう。1938年2月9日には大阪毎日新聞社が主催した「更生中国文化建设座談会」に出席したが、それは日本への協力ととられても仕方のない行動であった。1939年8月には北京大学教授兼北京大学文学学院院长の職を引き継いだ。周作人に言わせれば文学学院院长の職を引き継いだのは“応酬”(「つき合い」「交際」)の上でのことであった<sup>(8)</sup>が、日本側が「周作人」の名を欲していたこと、それに協力したことには注意しておかなければならない。1941年の1月には教育総務督弁に就任している。1941年4月には東京で開かれた東亜文化協議会文学部会に出席し、明治神宮、靖国神社を参拝、また、5月には汪精衛の随員として満州国皇帝溥儀に会って

いる。1945年8月15日の日本の敗戦後、周作人は逮捕され、対日協力の罪を問われた。新中国成立後は、日本文学などの翻訳に従事し、1955年4月には『日本狂言選』を、1962年1月には『石川啄木詩歌集』を出版している。また、1963年2月には『古事記』の翻訳を完成し出版した。

1966年、文化大革命発動後の8月26日、紅の腕章をした“革命小将”が周作人宅にやって来て周揚と周作人の関係を調査しに来たと言ひ、家の中を搜索し始める。周作人は同年9月、10月には「死」を要求する。翌1967年5月6日午後4時周作人永眠、帰らぬ人となる。」(拙稿(平成14年)「周作人の日本論—『日本管窺』を中心として—」『日本語日本学研究』第3号 pp.33-34)

○ 原文の引用は簡体字表記としたが、読者の便に供するため書名、中文日訳文等では日本で通用する文字を使用したことを付言しておく。